

天平びとの声をきく―地下の正倉院・平城宮木簡のすべて

解説シート 1

【第一室】天平びととの五〇年

展示期間 I 二〇一〇年 九月二十五日(土)―十月一日(月)

II 十月一日(水)―十月二十五日(月)

III 十月二十七日(水)―十一月七日(日)

1

長屋王を「親王」と表記するアワビの「簀」の荷札 (I期展示)

(SD四七五〇出土、『平城宮発掘調査出土木簡概報』25―30頁上段)

長屋親王宮鮑大賛十編

長さ二四〇mm・幅二六mm・厚さ四mm 〇三二型式

長屋王の邸宅へ届けられた鮑^{あわび}の荷札。長屋王は、天武天皇の子高市皇子を父に、天智天皇の子御名部皇女母として誕生した。したがって、規定上は「王」に過ぎないが、木簡には天皇の兄弟や子を示す「親王」と記される。また、天皇クラスの人物に奉られる食料の呼び名である簀を消費していた。この木簡は、長屋王が式部卿という役所の長官をつとめていた時期のもので、大臣として政権を担うよりもずっと前のものである。『続日本紀』などの史料からはうかがい知ることができなかった事実が、この木簡には隠されている。

なお、木簡は、平城宮内の雅楽寮から長屋王の家令^{か令}のもとに送られた文書木簡(移)とともに、邸宅の主お特定する決め手となった。

2

内蔵付きの鹿肉のラベルの木簡

(SD三四一〇・SD一二五〇合流点出土、『平城宮木簡』三、三五六五)

鹿肉 在五蔵

長さ五一mm・幅一八mm・厚さ五mm 〇三二型式

内蔵付きの鹿肉^{かじし}(鹿肉)の付札。最小の木簡の一つだが、丁寧に加工され、たいへん精巧につくられている。

木簡にみえる肉は、鹿・猪・雉・兔などに限られる。食用に供する肉の木簡もあるが、この木簡の場合は、特別なつくりからみて、大学寮で行われた儒教のまつり、積奠^{せきけん}の犠牲獣として捧げられたものの付札であろう。

3 藤原仲麻呂の乱前夜の政治的緊張をうかがわせる木簡（Ⅲ期展示）

『平城宮木簡』一、一。『平城宮発掘調査出土木簡概報』35—14頁上段）
（SK二一九出土）

〔表寺請 小豆一斗 醬一〇五升 大床所 酢 末醬等
〔斗カ〕

〔裏右四種物竹波命婦御所 三月六日

長さ二五九■・幅一九■・厚さ四■ ○八一型式

某寺が大膳職とみられる平城宮内の役所に対し、小豆・醬・酢・末醬の四種類の食材を請求する木簡。竹波命婦は常陸国出身の采女で、孝謙天皇の側近の女官の壬生直小家主女とみられる。この木簡そのものが直接語るところはこれだけだが、一緒に見つかった木簡には、七六一・二年（天平宝字五・六）の年紀の書かれたものがある。SK二一九の木簡は、ゴミ捨て穴に一括して捨てられた遺物とみられるから、3も同時期の木簡と考えられる。これによって、竹波命婦が壬生直小家主人女であることが確実になるだけでなく、孝謙太上天皇が淳仁天皇と対立して法華寺に居住していた時期の、緊迫した政情を背景にもつ木簡であることがみえてくる。

このように、この木簡は平城宮第一号木簡の名に相応しい内容の奥行きをもつ木簡であるが、文字をよく見ると、左側が切れていることがわかる。本来の木簡は現状の一・五倍ほどの幅があったとみられる。これは、要らなくなった木簡を、籾木（おしり）を拭くための木ぎれ）として再利用するために半裁した痕跡である。